liomatous 12例，fibroblastic 5例，transitional 4例，angioblastic 2例，psamomatous 1例）．使用機種は東芝 MRT-15A 型（0.15 T），IR 施行例31例中，low intensity 16例，iso intensity 12例，iso-low intensity 3例を示した．IRimage で腫瘍周辺が hypointensity となり周囲脳実質との境界を明瞭に識別出来るものは，20/32（63%）である．SE においては，施行20例において，low intensity 2例，iso intensity 3例，high intensity 9例，mixed intensity 6例であり，IR に比較して多様性を示している．これら MRI により得られた所見と CTscan，組織学的診断を加え検討し報告する．

34）第四脳室髄膜腫の1症例

小沢　常徳・江塚　　勇
山本　　潔・小出　　章（新潟労災病院 脳外科）

第四脳室に発生する髄膜腫は，極めて稀である．我々は，頭蓋内圧亢進症状にて発症した，第四脳室髄膜腫の症例を経験したので報告する．

症例は，71歳の女性．'86年6月頃より食欲不振，呕吐が出現，続いて右下肢の不随意運動が出現，8月になり右上肢にも出現した．12月18日当科初診．左方への眼振と右側の小脳性運動失調，右上肢に強い不随意運動を認めた．X線 CT にて第三脳室以上の中等度の水頭症と，第四脳室を占拠する径約4cmの球形の等吸収腫瘤を認め，造影剤にて強く増強された．DSA にて右 PICA の choroidal branch と右 SCA より流入する腫瘍陰影を認めた．以上より meningioma が強く疑われた．12月25日全摘出し，組織学的には fibroblastic meningioma と診断された．術後は右上下肢の不随意運動を残したが，小脳性運動失調は消失した．

第四脳室髄膜腫は，文献上17例の報告しかない極めて稀なものである．特徴的症状はないが，その診断には，CT 及び血管撮影が有用であった．

35）松果体部髄膜腫の1例

豊田　章宏・高橋　　明
村上　寿治・齊木　　巌（岩手医科大学 脳神経外科）
金谷　春之

松果体部髄膜腫の報告は少なく，文献的にも全髄膜腫に対する頻度は不明である．私共は顔面痙攣のために入院した症例に松果体部髄膜腫を認め全摘したので報告する．症例は58才，男性．昭和50年頃より出現した左顔面痙攣のため，昭和61年6月6日当科に入院した．既往歴は特記事項なく，全身状態良好で，神経学的脱落症状も認められなかった．頭部 CT 所見は小脳橋角部には異常なく松果体部に造影効果のある卵型，境界明瞭な軽度高吸収域（2×2×2cm）を認めた．脳血管写上，右内頸動脈より移行するテント動脈から血流を受け，動脈相から静脈相にかけてほぼ均一な腫瘍陰影が認められた．また左顔面痙攣の原因として左後下小脳動脈が考えられた．手術は昭和61年7月16日 Neuro-vascular decompression 施行し，顔面痙攣は完全に消失，松果体部髄膜腫に対しては昭和61年8月13日，low parieto-occipital approach にて腫瘍全摘，組織は meningothe liomatous meningioma であった．術後経過は良好である．松果体部髄膜腫の1例につき，若干の文献的考察を加えて報告する．

36）純粋なクモ膜下出血にて発症した蝶形骨縁髄膜腫の1例

西沢　英二・中村　正直
山本　弘之・河野　拓司（日立中央病院 脳神経外科）
鎌田　健一

我々は，純粋なクモ膜下出血にて発症した，蝶形骨縁髄膜腫の一例を経験したので報告する．症例は，55歳の男性で，高血圧を除いて，特記すべき既往歴はなかったが，突然激しい後頸部痛にて発症した．CT にて，脳底槽に広汎なクモ膜下出血を認めた．血管撮影にて，右内頸動脈から中大脳動脈領域にかけて，血管集ぞく像を認めた．約一ケ月後に根治手術を行なったが，手術所見は，血管に富む硬い腫ようであり，組織像は，meningothelial meningioma であった．一般に，脳腫ようにおける出血の頻度は1～10%程度といわれており，転移性脳腫ようや神経こう腫で多い．髄膜腫の純粋なクモ膜下出血例は稀であり，出血機序を中心に，若干の文献的考察を加え報告する．

37）塞栓術後長期にわたって造影剤の pooling を認めた髄膜腫の3例

倉島　昭彦・田中　隆一
小池　哲雄・皆河　崇志（新潟大学脳研究所 脳神経外科）
長谷川　彰

髄膜腫患者で術前に radiopaque lvalon を用いて人工塞栓術を施行した16症例中，塞栓術の際に用いた造影剤の腫瘍内での pooling を塞栓術後6～10日の長期にわたって認めた3例について手術所見と対比し検討した．Emboli として用いたのは radiopaque lvalon で，細粒の size は最初に149～250μ のものを，症例